

どちらが本物か

〔聖書〕列王記上18章20～40節

アハブはイスラエルのすべての人々に使いを送り、預言者たちをカルメル山に集めた。エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」民はひと言も答えなかった。エリヤは更に民に向かって言った。「わたしはただ一人、主の預言者として残った。バアルの預言者は四百五十人もいる。我々に二頭の雄牛を用意してもらいたい。彼らに一頭の雄牛を選ばせて、裂いて薪の上に載せ、火をつけずにおかせなさい。わたしも一頭の雄牛を同じようにして、薪の上に載せ、火をつけずにおく。そこであなたたちはあなたたちの神の名を呼び、わたしは主の御名を呼ぶことにしよう。火をもって答える神こそ神であるはずだ。」民は皆、「それがいい」と答えた。エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたたちは大勢だから、まずあなたたちが一頭の雄牛を選んで準備し、あなたたちの神の名を呼びなさい。火をつけてはならない。」彼らは与えられた雄牛を取って準備し、朝から真昼までバアルの名を呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈った。しかし、声もなく答える者もなかった。彼らは築いた祭壇の周りを跳び回った。真昼ごろ、エリヤは彼らを嘲って言った。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」彼らは大声を張り上げ、彼らのならわしに従って剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至った。真昼を過ぎても、彼らは狂ったように叫び続け、献げ物をささげる時刻になった。しかし、声もなく答える者もなく、何の兆候もなかった。エリヤはすべての民に向かって、「わたしの近くに來なさい」と言った。すべての民が彼の近くに來ると、彼は壊された主の祭壇を修復した。エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルである」と告げられたヤコブの子孫の部族の数に従って、十二の石を取り、その石を用いて主の御名のために祭壇を築き、祭壇の周りに種二セアを入れることのできるほどの溝を掘った。次に薪を並べ、雄牛を切り裂き、それを薪の上に載せ、「四つの瓶に水を満たして、いけにえと薪の上にその水を注げ」と命じた。彼が「もう一度」と言うと、彼らはもう一度そうした。彼が更に「三度目を」と言うと、彼らは三度同じようにした。水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに来て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。」すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。エリヤは、「バアルの預言者どもを捕らえよ。一人も逃がしてはならない」と民に命じた。民が彼らを抑えようとすると、エリヤは彼らをキシヨン川に連れて行って殺した。

〔序〕カルメル山の対決

北王国第7代のアハブ王はシドン王の娘イゼベルを王妃に迎えました。彼女は都のサマリアに自分が信じるバアルの神殿を建て祭壇を築いて、その信仰を熱心に広め始めました。バアルとは大地の生命力を象徴する神です。アハブも彼女に追従して、バアルの祭壇の傍らに、豊穡の女神アシェラ像を造りました。イゼベルは主の預言者を迫害して、絶滅させようとしていました。

神さまは預言者エリヤをアハブ王に遣わして、神の裁きを宣告なさいました。露も雨も降らない飢饉の到来です。エリヤは2年間、身を隠していましたが、3年目に再び王の前に現れます。「お前か、イスラエルを煩わせる者よ」。「主の戒めを捨て、バアルに従っているあなたこそ、イスラエルを煩わしているのだ」。

エリヤはカルメル山に、イゼベルに庇護されているバアルとアシェラの預言者全員 850 人を集め、自分と対決するよう王に求めました。こうして集まって来たイスラエルの民たちにエリヤは申しました。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え」。

薪の上に雄牛一頭を裂いて載せ、祈りを捧げます。どちらの神が火をもって祈りに答える神でしょうか。先ずバアルの預言者たちが祈り始めました。大声をあげ、祭壇の周りを跳び回って祈りました。昼過ぎからは、剣や槍で体を傷つけ、血を流してまで狂ったように叫び続けましたが、火の答えはありませんでした。

エリヤの番です。彼はイスラエル12部族を表す12の石を築いて祭壇を修復し、薪を並べて雄牛を切り裂いて載せました。更に水を十分に注いだ上で、祈りました。「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であられることが、今日明らかになりますように。主よ、私に答えてください。そうすればこの民は、あなたが神であることを知るでしょう」。

すると主の火が降って、献げ物も薪も石も焼き尽くしました。民は皆ひれ伏して「主こそ神です」と叫びました。そこでバアルとアシェラの預言者は皆捕らえられ、キシヨン川で殺されてしまいました。

[1]日本人の信仰と聖書の神

江戸時代の国学者本居宣長は、日本最初の歴史書「古事記」の注釈書「古事記伝」(古代文化の最高峰と言われています)の著者として有名です。彼は日本人の信仰を「人でも生き物や自然の物でも、尋常ただならざるものを上(かみ)と呼ぶ」と定義しています。特別に勝れているものはなんでも「かみ」にしてしまうというのです。ですから日本では神が「八百万(やおよろず)の神々」といわれて、限りなく多いと思われてきました。これは色々なものに霊が宿っていると考えられる精霊信仰からくるものでしょう。

日本で一番多い神社はお稲荷さんで親しまれている稲荷神社でしょう。京都の伏見稲荷大社を総本社として、全国の稲作地帯に3万社あると言われていています。人々は豊年満作を祈願し、秋には感謝のお祭りをします。エリヤが戦ったバアルの神信仰も、豊年満作を受け持つ農業神だったのではないでしょうか。

日本では、無病息災、商売繁盛、家内安全、それに合格祈願、交通安全を願って、人々が色々な神社やお寺に参詣し、お札やお守りを頂いて、大切にしています。確かに人生には病気の苦しみ、商売の苦労を筆頭に、災害や事故から守られ、家族が仲良く暮らし、試験に合格して人生の進路が開けてくるようにという願いを、皆が切に求めています。そしてご利益信仰に精を出しています。しかしこの信仰の特色は、願いがかなわないと、あちらこちらに転々と移っていく無節操さです。

では仏教はどうでしょうか。仏教も色々の宗派があつて一口に言えませんが、私が一番心を引かれている仏教徒は、観世音菩薩像と地藏菩薩の画を書き続けている神戸の丸山寿美さんです。静かな悟りの境地をひたむきに求めて表現しようとしている作品の一つ一つが、実におだやかな優しさを伝えています。

丸山さんは法句経の次の言葉をよりどころにしています。「己れによるべは、己れを措(お)きて他になし。よくととのえし己れこそ、まこと得難きよるべなり」。自分の頼りになるものは自分しかいない。だからよくととのえられた自分になるように、ひたすら精進していこうというのでしょうか。

丸山さんは言います。「悩みもあり 哀しみもあり 幸せも 喜びも数々あれど 仏は何時も私のまわりを ただ静々と通りゆき 何をか語らん 何をか告げん 知りたくて 悟りたくて ただ一心で またも 仏の後を追う」。またこう言います。「今日のこの一刻を 大切に生きよ 確かに生きよと 私の中の私が ささやいています」。これは自己との対話の世界ですね。

ですから仏像や仏画と対座し、観想しながら自分をととのえていくことに精進する人にとっては、仏像・仏画は礼拝の対象ではありません。あるお坊さんが、自分の守っている本堂の見事な仏像を「あんなもの、あつてもなくてもかまわない」と言ったそうですが、本当にそうだと思います。本当の仏教者は、偶像礼拝とは無縁の世界に生きているのでしょうか。

ここにいたって聖書によって養われる信仰と仏教者の信仰が、全く質を異にしていることが分かってきます。仏教徒は仏が徹底して沈黙者なので、自己との対話に精進していきます。やはり無の世界なのでしょう。これに対して聖書の神は、言葉をもって語りかけ、行動を起こされる人格的実在者です。言葉には神さまの命が込められています。私たちは神さまの言葉を真剣に聞き応答することにより、神さまの命をいただいていくのです。

丹頂鶴自然公園の実験によりますと、丹頂鶴の卵は保温器で温められても最後の10日間言葉をかけをされないと雛が殻を破って生まれてこない。言葉がかけられることによって、卵の内にある命がひきだされて、生きるものとなるのだそうです。まして私たち人間は、言葉をかけられていくことによって人格が形成され人間になっていくのです。ですから人間を創造された神さまが、言葉をもって私たちに絶えず語りかけ、私たちの人格を養い育てていこうとされることは当然ではないでしょうか。

仏教徒は沈黙する仏の前で自己との対話に精進し、ととのえられた自己、優れた人格を確立していくといわれます。私はそのような自分との対話に精進する方に深く敬意を抱きます。でも神さまとの対話と自分との対話を比べる時、私にとっては真の神さまとの対話の方が、人格を育てていくにあたってはるかに優れていると思えるのです。

何故ならば、私のような者が一人で語り始めると、どうしても手前勝手な自我のこだわりから抜け出ることが困難だからです。神さまああしてください、こうしてくださいという祈りは、神さまを召使にして

自分の欲を果たそうとする自己中心的なご利益信仰に他なりません。神さまから正しい命の言葉を聞き、自我のこだわりから引き離されて、真実に応答していこうとするところで、私の人間としての在るべき人格が創られていくのではないのでしょうか。私にとっては、もの言わぬ神をつくって拝むことは、自分を卑しくしていく道だと思うのです。

[2]神さまとの真実な交わり

日本のプロテスタントの信仰の発生地は、横浜・熊本・札幌です。札幌の場合は「青年よ、キリストにあつて、大志を抱け(Boys, be ambitious in Christ)」の言葉で有名な Dr. William Clark の感化を受けた青年たちから始まりました。クラークは北海道開拓使長官の黒田清隆に招かれ、札幌農学校初代教頭として明治9年(1876年)に来日しました。

彼は横浜に上陸して、昼間から酒に酔って醜態をさらしている若者を幾人も見かけて驚きました。そこで横浜から苫小牧までの船旅の途中で、アメリカから持ってきたブランデーの箱を全部海に投げ捨て、札幌滞在中はアルコールを一切口にしなかったそうです。彼は聖書も沢山持って来ました。聖書をもって生徒の人格教育をしようとしたのです。黒田長官は国立学校だからそれは困ると反対しましたが、それでは教育に責任が持てないからアメリカに帰ると言われて、仕方なしに許可したそうです。

クラークは聖書を教え始めてしばらくしてから、「耶蘇の信徒の誓約(イエスを信じる者の誓約)」を書いて第一期生に示しました。すると16人全員が署名し、翌年に入学した第二期生15人もそれに署名したそうです。クラークは僅か10ヶ月しか札幌に滞在しませんでしたので、第二期生は直接クラークの教えに接していません。しかしこの誓約にこめられたクラークの信仰は大きな影響を二期生にも与え、彼らの中から宮部金吾、内村鑑三、新渡戸稲造などの優れた信仰者が出たのでした。

この誓約は二部から成っており、罪を贖うキリストの救いを信じること、それゆえに十戒を守る生活を送るというものです。すなわち十戒を守る生活が彼ら若者たちの信仰生活のしっかりとした枠組みとなり、札幌バンドの若者たちの成長を導いたのでした。宮部金吾17才、内村鑑三16才、新渡戸稲造15才の時に誓約しています。

僅か10ヶ月間しか教えずに帰国したにもかかわらず、後から入学してきた生徒たちにまで素晴らしい生涯を送らせた教育の成果は、とりもなおさず「耶蘇の信徒の誓約」が生み出したものに他なりません。キリスト信仰と十戒を心に刻むことが、どれほど大切かを改めて知る思いがします。

十戒の最初の言葉に注目しましょう。「わたしは主(ヤハウェ)、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。これは神さまの自己紹介です。神さまとはどういうお方なのでしょう。私にどんなことをしてくださるお方なのでしょう。ここで神さまは、ご自分がイスラエルの民にどんな事をしてくださったかを単純明快に語っておられます。それは奴隷から自由人への解放

者でした。

奴隷とは人間らしく生きていけない状態をいいます。貧しさや弱さの故に、周りから人間扱いされなくなっている場合もあるでしょう。あるいは自分の意志の弱さから自分で人間らしく生きられなくなっている場合もあるでしょう。また強い者の理不尽な暴虐によって、しいたげられている場合もあります。しかし神さまはそのような奴隷状態から私たちを救い出し、神さまから与えられた本来在るべき姿をもって自由に生きていけるようにしてくださるお方なのです。

続いて十戒の第一の戒めを見てみましょう。「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」。英語の King James Version では ”Thou shalt have no other gods before me.”

剣道では、相手の真正面に我が身を置き、相手の目を見据えながら相手の全身を捉え、相手の心の動きを察知して、全身全霊を込めた攻防をする修練を積み重ねていきます。相手と自分の間に邪念を入れてはなりません。瞬間の動きが乱れるのです。

これと同じ様に、神さまの真正面に我が身を置き、真剣に神さまに向かう時には、神さまと私以外の何物も入る余地はありません。一対一で全身全霊を込めて相対峙することは、剣道以上に信仰においては大事なことではないでしょうか。

友だちは少ないより多いほうが良い。しかし一体となる夫と妻の場合は一対一、その間に他の何者も入る余地はありません。アブラハムとサラ夫婦になかなか子どもが生まれなかった時、サラは自分の召使ハガルにアブラハムの子を生ませて、跡取りにしようと思いました。しかしアブラハムとサラとの間にハガルが割り込んでくることによって、夫婦の愛に亀裂が生じました。そこでサラはハガルを追い出してしまいます(創世記 16 章)。随分手前勝手なひどい話です。でも夫婦の真剣な一体性と一夫多妻とは決して両立いたしません。

だとしますと、神さまと私との関係も当然一対一でなければなりません。もしも神さまを二人・三人持つことが出来るとすれば、その神さまと本当に一体となることを求めているからに他なりません。神さまと一体にならずに、どうして神さまの真実の命を受けることが出来ましょうか。あっちの神さまと相談し、こっちの神さまにお願いして、本当に真実の信仰が確立するのでしょうか。

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」。神さまの前に立つのは私です。右を見、左を見てさてどうしようかという問題ではないのです。「あなたには――あってはならない」あくまでも私が問われています。私が全身全霊をこめて神さまの御前に立ち、真っ直ぐに神さまを見上げ、神さまから真剣に聞き、応答していくことが信仰なのです。そしてそこから人間としての真実さ・誠実さが生まれてくるのです。

[結]御言葉に聞き従って生きる

カルメル山での対決で、エリヤは集まって来た民すべてに呼びかけました。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら主に従え。もしバアルが神であるならバアルに従え」。

バアルは大地の生産力を、地に宿る超自然的な霊の力だとして、神格化した神です。しかし雨が降らず飢饉になれば、地は干からびていきます。作物を豊かにもたらすバアルの力は衰え、無力さを現します。飢饉になればバアルはどうすることもできないのです。豊かな収穫をもたらすアシュラの女神も同じです。だから預言者 850 人が、朝から午後3時まで大声で叫び血を流して呼ばわっても、答えることが出来なかったのは、当然でした。

偶像は、ご利益を求める人間が作り上げた、神に値しない像でしかありません。それを有り難がたらせ、人々に拝ませているのは、その宗教を利用して自分の支配権を確立しようとしている王妃イザベルの政治的たくらみでした。エリヤの問いかけに民衆が一言も答えられなかったのも、主の預言者を迫害し殺しまくるイザベルの権力を恐れたからでしょう。

支配権力と結びつき、利用されて墮落する宗教のおぞましさを、私たちは歴史のなかで繰り返し学んできました。宗教と政治の混同、教会と国家の癒着は、人権を抑圧し、批判を許さぬ国家権力の神聖化と、教会の世俗権力化をもたらします。政教分離の原則はバプテストの先達が勝ち取ってきた大切な嗣業であることを、あらためて自覚したいと思います。

先週、東日本大震災の最中での、山浦医師の証をご紹介します。津波に襲われ九死に一生を得た山浦さんは、瓦礫の山の中で涙を激しく流します。しかしその時「わが神わが神なぜわたしをお見捨てになったのですか」という十字架上のイエスさまの叫びが心に響いてきました。そして「よし、へこたれないぞ！」と決意したそうです。どうしてでしょうか？

主が叫ばれた言葉は、詩編 22 編の冒頭の言葉です。その後には「私たちの先祖は貴方により頼み、救われてきた。助けを求めて救い出され、裏切られたことはない」という絶対的な信頼が歌われているのです。だから山浦さんは「命を助けられた自分も、神さまの御用に用いられて働かなければ」と思ったのでした。これが信頼を寄せて神さまからの語りかけを聞きながら、それに答えて生きていく信仰者なのですね。

神さまは、必ず私たちの叫び、呼びかけに答えてくださいます。どんなに絶望的な状況になろうとも、必ず救いの御業を行われるお方です。信じて、神さまの語りかけに耳をすませ、御言葉に聞き従い、神さまの御用に用いられて生きる生き方をして参りましょう。

完